
博士と私達

黄黒真直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士と私達

【Zコード】

N1268X

【作者名】

黄黒真直

【あらすじ】

日本のどこかにある研究所で、「博士」と「私」が延々と会話をし続けるだけの話。科学知識がそこかしこに登場しますが、適当に書いてるだけなので信用しない方が身のためです。1話完結、不定期連載。むかーし書いてネットの掲示板に載せた話を、細々と転載していきます。各話のあとがきに書かれているのは、執筆時期。

博士と私

「本格化する地球温暖化を前にして、物理学者である我々に何ができるか」「

「突然どうしたんですか、博士」

「僕は問いたい」

「私ですか」

「他に誰がいる」

「博士が」

「今のは独り言だと?」

「博士、疲れるとよく独り言いつじゃないですか」

「うむ。君の觀察は実に正しい。だがこれは独り言ではない」

「そうですか」

「で、どう思ひ?」

「そうですね。物理学と立場からすれば、今までとは全く違う熱機関の開発が可能でしょうか。」

現在のところ、化学の方面から、いわゆるバイオマス燃料が開発されていますが、

我々は燃料ではなく、機械の方を改良できるのでしょうか？」

「ふむ、実に君らしい、わかつたよくなわからなによくな回答だ」

「私にはわかるので大丈夫です」

「それではダメだ。科学の世界では、相手に理解されない理論は存在しないに等しい」

「別に、博士に理解してもいいね」とは思っていません

「やうか」

「やうです。……で、やうして突然そんな話をじだしたんですか」

「気になるか」

「気になるまか」

「やうかやうか。気になるか」

「早く言つてください」

「そんなに言つて欲しいか

「やうぱりいいです」

「……いや、聞いてくれないか

「聞いて欲しいんですか」

「ああ

「わかりました」

「よかつた。見てくれ、僕の白衣を

「びしょびしょに濡れていますね」

「何故だと思つ

「先ほど、土砂降りの雨の中、走つて帰つて来られたからですね」

「そうだ。何故今日のこの時、この瞬間に、この突然の夕立が起つたのだろうか」

「私は知りません」

「地球温暖化のせいだ」

「は？」

「地球温暖化によつて雨が増える事は、シミュレーションでわかつてゐる。

故に、この雨も地球温暖化によるものだ。だから僕の白衣が濡れたのは、地球温暖化のせいなのだ

「……」

「今一度問いたい。本格化する地球温暖化に対して、物理学者であ

る我々に何ができるのか

「博士。今はいい折り畳み傘が100円ショップに売っています」

「つむ。それが僕の求めていた答えだ」

博士と私（後書き）

2007年 梅雨

「博士。ちょっとよろしくでしょうか」

「なにかね」

「研究所の電気代なんですが、今月はいつもより十万近く増えています」

「ふむ。何故だろ?」

「これから夏になつたら、さらに冷房代までプラスされるんですよ。なにが原因で電気代が増えたのか、早めに調べておいた方が…」

「原因はわからんが、冷房代に関しては心配ないだろ?」

「何故ですか?」

「君は『冷たい熱エネルギー』といふのを知つてゐるかね」

「は?」

「知つてゐるのかね、知らないのかね」

「知らないと答えるのが不本意なので、少し考えさせてください」

「意外に可愛いところがあるな」

「別に可愛いではありません」

「いやいや可愛いぞ」

「黙つてください」

「わかつたから顕微鏡を振り回さないでくれ」

「で、冷たい熱エネルギーですか」

「そうだ」

「普通熱エネルギーといえば、温度が高くなると大きくなりますよね。冷たいのなら、エネルギーは低い事になる」

「高校物理だな。その通り。だがその低いエネルギーが今、環境問題の観点から注目されている」

「低エネルギーが? なにに使つんですか?」

「降参か」

「……で?」

「冷たい熱エネルギーと言つのは、雪や氷の事だ」

「は?」

「いや、本当だ。冬の間、北海道や東北地方などに降り積もつた雪を巨大な魔法瓶に入れて取つておき、

それを夏になつたら使おう、と言つ案だ」

「ああ、なるほど」

「やつかると、これまで捨てる場所に困っていた雪を集める場所が作れるつべ、

夏にそれを利用する事で省エネになり、一石二鳥なのだ

「それは知りませんとした」

「それで話を戻すと」

「何の話でしたつけ。 電気代の話でしたね」

「ああ。 1Jの部屋は涼しいと想わないか

「冷房つけるんじやないんですか？」

「いや。 そんな事をしたら電気代がかかるし、省エネにもならない

「それじゃあ、冷たい熱エネルギーを？」

「その通りだ」

「でも、1Jの辺、冬に雪なんて降りましたつけ？ 東北から輸入したんですか？」

「まあか。 作ったんだよ。 それも、雪より冷たいやつを

「は？」

「見たまえ、この水槽一杯の液体窒素を…」これを先ほど、部屋全体に撒いたのだ。

「コップに移して部屋中に置くだけでも、随分涼しくなるはずだ」

「……これを作ったって、ビニード?」

「あれ、知らなかつたかね。うちの研究所には液体窒素製造機があるのだ。

まあ、ここ最近使つてなかつたから知らないのも無理ないかもしれないが」

「博士」

「なにかね」

「今月の電気代が跳ね上がつた理由、それです」

博士と私パート2（後書き）

2007年 初夏

博士と私パート3

「博士。手紙が届いてます」

「ほう？ おお、研究仲間からだ」

「なにか発見でもしたんだじょうか？」

「どれどれ…お？ 結婚式の招待状だ」

「は、結婚式？ 」のトシで？」

「彼は若いよ。まだ30前だったはずだ。やうかそうか、遂に結婚するのか」

「行くんですか？」

「ああ、そうするつもりだ」

「…やうござば、博士は独身なんでしたっけ？」

「やうだ」

「どうして結婚しないんです？」

「……。平凡原理、を知っているかね？」

「まあ、そのぐらいなら私も。『全ては平凡である』と書いた原理ですかね」

「そうだ。この宇宙において、特殊な現象は何一つとして存在し得ない。」

君が10メートルの高さからボールを落とせば、それは1・4秒後に地面に落ちるし、僕が10メートルの高さからボールを落としても、また然りだ」

「でしょうね。でなければ困ります」

「だからみんな、宇宙人がいると信じている。この地球に生命がいるのだから、他にもいたつておかしくない。それが知的生命体であるかどうか、そうであつたとしてどのくらいの知性を持ち合わせているか、は抜きにして、『地球外生命体がいる』という事に関しては、いまはあまり異論が出ていない」

「現に木星の惑星・エウロパに生命がいるんじゃないか、ってみんな真剣に考えてますものね」

「ああ。平凡原理とは、ある意味、全ての科学における暗黙の了解ともいえる」

「……で、それと結婚しない事に何の関係が」

「君はおかしいと思わないかね」

「何がです」

「みんな何故恋人は1度に1人しか作ってはいけない、と考えているのか」

「は？」

「仮にある男性が好きになる条件がAだったとしよう。そして田の前に、まさにAである女性が現れる。しかし平凡原理によれば、ある1人の女性がAであるならば、他の別な女性もまたAであると言える」

「はあ。ま、そうですね」

「仮に、Aと言つ条件を満たす女性がこの世に……この地球上に1人しか存在しないとしよう。

しかしそうすると、その男性がその女性にめぐり合つ確率は、単純に考えても60億分の1になつてしまつ。そんな確率は〇と言つてもいい」

「……なんとなく、博士の言いたい事がわかつてきました」

「しかも、そのAと言つ条件を満たす女性が、その男性を好きになる、とは限らない。

仮にこの女性が好きになる条件がBだとして、男性がBである確率はいかほどか？」

「低いですね」

「だらり、するところに世にカップルなど存在しない事になつてしまつ。だがこれは事実と反する。

よつて背理法により、Aと言つ条件を満たす女性はこの地球上に少なくとも2人、存在しなければならない」

「それならば、この男性は同時に2人以上の女性を好きになつても

おかしくない、いや、ならなければならぬ、と言つ事ですか？」

「その通りだ。なのにみな、それを許さない。このような非論理的な事は僕は好きではない。だから結婚はもううん、恋人も作らないとこつわけだ」

「はあ。でも博士」

「なにかね？」

「博士は別に、結婚しないんじやなくて、結婚できない、のでは？」

「……」

「……」

「……！」

「……？」

「……！」

「「めんなさい博士。私、まさか博士に傷つくとか、悲しむとか、そういう人間的愛情があるだなんて思つてなかつたんです。」

「そうですよね、この世に特別な存在なんていないのでから、博士も人間的感情を持ち合わせてますよね」

「そうだ。それこそが暗黙の了解だつ」

「ですよね、「めんなさい。元気を出してください。」

そうだ、今度一緒にどこか食事にでも行きましょう。ね、博士

博士と私パート3（後書き）

2007年 夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1268x/>

博士と私達

2011年12月1日21時45分発行